

2017年度日本時間生物学会学術奨励賞 選考過程と結果

基礎科学部門

受賞者 吉種 光 氏 (38歳)

講評

今回は基礎科学部門に6名の応募があり、しかも業績のある方が多く、選考に苦労しました。評価のポイントは基礎科学、臨床・社会の両部門共通で、研究（内容、発表、貢献度）、将来性、時間生物学会での活動の3点に絞り、それぞれ、5:3:2の割合で評価しました。まず選考委員が独自の観点から全候補者を採点した結果、総合点で1位から4位までが3点以内の差に収まる大接戦でした。その後、各ポイントについて議論し、最終的には委員の投票で決定しました。

受賞者の吉種氏は、大学院入学以来一貫して時間生物学研究に関与してきました。氏の研究は、主として概日リズム発現における分子生物学的メカニズムの解明で、時計遺伝子の転写調節や時計たんぱく質のリン酸化などに焦点を当て、概日振動への影響や、概日時計への入出力系への作用について新しい発見を次々と発表してきました。なかでも、Adar2遺伝子の転写制御概日リズムがRNA編集リズムへと伝達される機序とそのノックアウトによる数多くの転写産物概日リズムの消失は（Nature Genetics, 2017）、概日時計の出力系における転写後調節の重要性を具体的に示したのものとして高く評価されました。また、氏の研究の特徴と優位性は、リズム解析がin vitro, ex vivoにとどまらず、得られた発見を行動リズムなどのin vivoの表現系まで展開しているところにあります。業績発表や貢献度では、約14年の研究歴（含大学院）で時間生物学に関係する英文論文が13編、そのうち、筆頭著者4編、第2著者（含co-correspondence）2編と優れています。

氏の将来性については、これまで一貫してリズム研究に従事し、その基本をしっかりと身につけていることが強みで、分子生物学を主たる研究領域としながらも、守備範囲を行動科学まで拡大しようとする姿勢が高く評価されました。

氏の会員歴は約14年で、毎年学会発表を行っています。学術大会の組織委員、生物リズム夏の学校運営委員、生物リズム若手研究者集いの世話人など、学会活動は極めて優秀です。

臨床・社会部門

受賞者 北村真吾 氏 (41歳)

講評

今回は臨床・社会部門に5名の応募がありました。締切を過ぎた応募が1件ありましたが、選考委員会での議論の結果、受理しないことになりました。5名の応募者の研究にはそれぞれ特徴があり、将来性のある研究も多く見受けられましたが、その中で北村氏は概日リズム障害の本質に迫る研究を展開しており、他の候補者よりも1歩抜き出ておりました。

受賞者の北村氏は、大学院時代から一貫して睡眠や気分に関する研究に従事してきました。氏の研究は、主として概日リズムと睡眠障害の病態生理的研究で、概日リズム障害者を対象として、隔離実験室におけるフリーラン周期 (Biol Psychiatry, 2013) やクロノタイプとの関係 (Chronobiol Int, 2014) を明らかにし、概日リズム障害の発生機序の一端を解明しました。また最近の研究では、睡眠不足を自覚していない若年層に潜在的な睡眠負債が存在することを明らかにしました (Scientific Reports, 2016)。これらの研究は健常被験者のみならず病者も対象としたものであり、様々な制約のなかで得られた貴重な発見として高く評価されるだけでなく、ヒト概日リズム機能の本質にも迫る重要な研究であることが認められました。業績発表や貢献度では、約16年の研究歴 (含大学院) で時間生物学に関する英文論文は17編、そのうち、筆頭著者5編、第2著者5編と極めて優れています。

氏の将来性については、これまで一貫してヒトを対象とした研究に従事し、概日リズムおよび睡眠研究の基本を身につけているだけでなく、さらに分子生物学的手法を用いて守備範囲を拡大しようとする姿勢が高く評価されました。

氏の会員歴は約8年で、6度の学術集会で発表 (ポスター、シンポジウム講演など) を行っています。また、第17回学術大会の実行委員長を務めるなど、学会活動は活発です。

2017年9月8日
選考委員長 本間研一